

第14講 戦後の歴史学

事前レポート課題：歴史学はこれからどこに向かっていくのか？

戦前の歴史

ランケ史学の導入（リース：明治20年1887年～明治35年1902年）

明治22年1889年：史学会創設、『史学雑誌』創刊

国家主義の強調

戦争への協力と権力への迎合

出発点としての敗戦

日本社会の後進性の自覚

封建的関係の残滓（地主制）

市民階級の未成熟

精神主義と非合理主義への反省

経済発展の不均衡と財閥の形成

マルクス主義歴史観

自然科学的（scientific）合理主義的歴史観

歴史を自然史の過程と見る（生産力と生産関係）

歴史におけるロマン主義

解放史観（革命重視）

文化史軽視

上部構造としての文化史

マックス・ウェーバー社会学

歴史の方法論としての理念型

エートス（宗教的職業倫理）への着目

社会経済史

経済学部の歴史学

大塚久雄（東京大学経済学部教授）

『近代欧州経済史序説』（1944年）

イギリス国民経済の発展

独立自営農民（ヨーマン）層分解と資本主義の発展

近代化のモデルとしてのイギリス資本主義

下からの革命：イギリスやフランス

上からの革命：プロイセン（シュタインやハルデンベルク等のユンカーの改革）や日本（山内容堂や松平春嶽などの大名ではなく大久保利通や西郷隆盛などの下級武士の革命）→封建的諸関係を残す（天皇制に代表される地主制度＝社会的後進性）

高橋幸八郎

『市民革命の研究』（1950年）

フランス革命によって創出された独立自営農民層がフランスの近代化を担う。

卒業論文は宗教改革か清教徒革命・アメリカ独立革命・フランス革命・プロイセン改革・産業革命・ロシア革命・ドイツ革命というふうに「なんとか革命」という論題を持つ。

古いところでは『イプエルの教訓』（古王国末期の革命）、スパルタクスの乱（古代ローマの奴隷反乱）、ジャックリーの乱やドイツ農民戦争など。

「もはや戦後ではない」（1956年の国民白書）

前年度の1955年に戦前の国民総生産に戻る。

イギリスやフランス、アメリカをモデルとしてキャッチ・アップすること

の無意味化。

ベトナム戦争によるアメリカ民主主義の陰り。

階級や民衆という抽象名詞にくくられてきた個人の顔や意識への関心。

近代世界への批判（従属理論・ポストコロニアリズム）

エドワード・サイード『オリエンタリズム』（1993年）

社会史

政治史の否定

階級闘争史の否定

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』（1974年）

網野善彦『無縁・公界・楽』（1978年）

伝承の影に潜む歴史を探求

中世史ブームの火付け

フランス『アナール学派』の紹介

フェルナン・ブローデル『フェリペ2世時代の地中海と地中海時代』（邦題『地中海』1991—95年）

自然環境のように変わることのないもの

ロング・デュレー（長期的に社会の構造となるもの）

家族のあり方、死の問題、結婚、相続

波の泡（出来事）

政治的事件

社会学的手法の清新さ（農民や職人、ユダヤ人や被差別民、老人や子供、女性、異端や魔女）

社会史の問題点

全体史が描けない

歴史があまりにもミクロになっていく

なんでも社会史、なんちゃって社会史の流行

歴史が分からなくなってきた

世界経済システム論

近代経済の発展は一国史では説明できない

国民国家を超えた経済の世界化（近代初頭）

イマヌエル・ウォーラーstein（川北稔訳）『史的システムとしての資本主義』
（1997年）

新文化史

近代化論からポスト近代化論へ

ピーター＝バーク（長谷川貴彦訳）『文化史とは何か』（2008年）

近代の相対化

近代は目的ではなく批判の対象

言説への関心